

総合博物館

# 青森県立郷土館だより

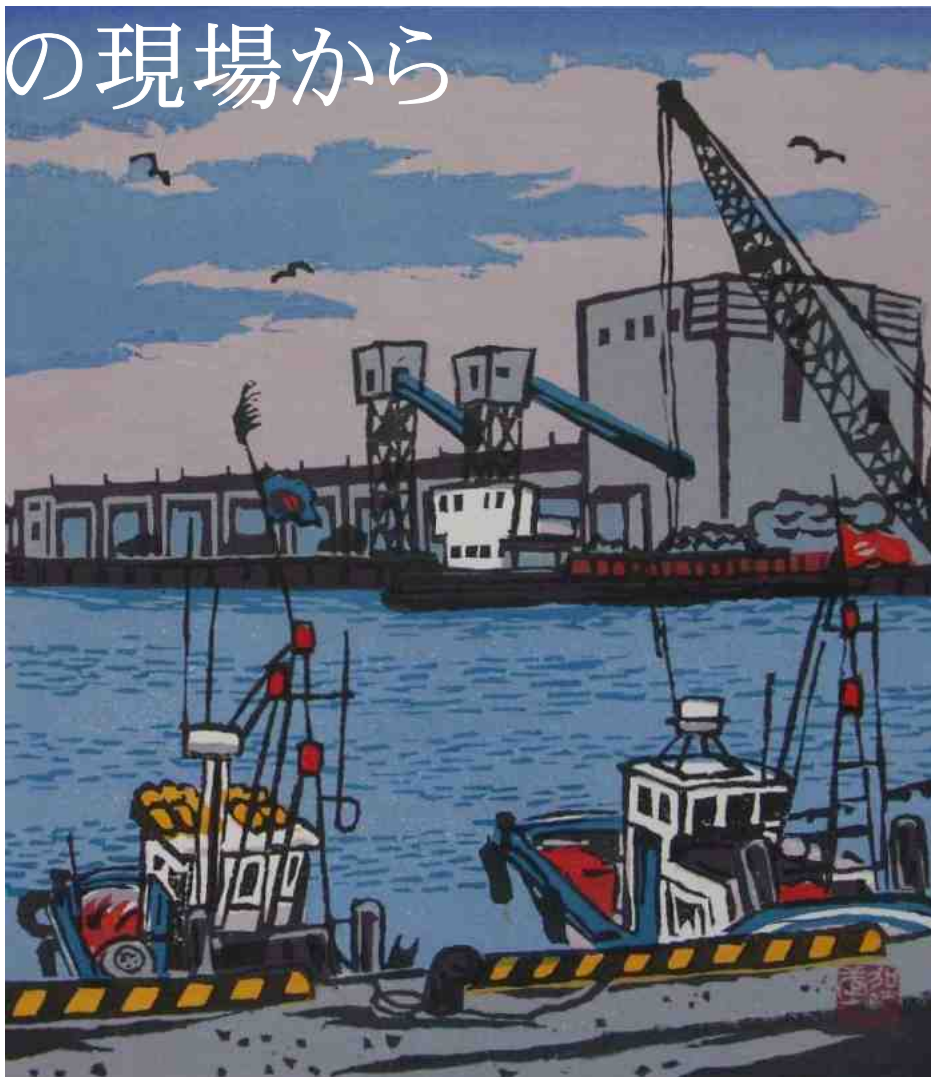
News from the Aomori Prefectural Museum

通巻142号 平成19年(2007)12月1日 Vol.38 No.3

## 共催展の現場から

### 加藤武夫

昭和5年(1930)生まれ。青森市出身。昭和23年の第16回東奥美術展で「機関区」が特別賞(資生堂賞)を受け、以後、同展・日本版画協会展・日本板画院展などで入選を重ねる。日本板画院理事(昭和55年)や同院審査副委員長(昭和57年)を務めた。平成17(2005)年、県立郷土館で「加藤武夫展」開催。



三沢港点描(平成7年) 木版 25.0×22.0cm

県立郷土館の共催展は、平成15年度(2003)からはじまりました。第1回「大昔の青森の大地に生きた動物たち」は、上北町歴史民俗資料館(現在の東北町歴史民俗資料館)で開催され、それ以来、毎年のように県内の各施設から共催展の申し込みがあります。今年度は11月現在で7件を開催し、延べにして約5000人の観覧者を数えました。

この後は12月14日(金)から来年3月9日(日)まで、みさわ斗南藩記念観光村先人記念館との共催で「加藤武夫展—彩りで見るとの版画の美—」が開催されます。当館が所蔵する加藤武夫氏の多色木版画を紹

介するものです。青森県東部の南部地方では、西部の津軽地方にくらべて版画展の回数が少ないのが実情です。この共催展は「広く版画のすばらしさを知ってもらいたい」という先人記念館の担当学芸員の熱意により実現しました。輝くような色彩の加藤作品を、こころゆくまで堪能してもらいたいと思います。

同展では前期と後期で作品の入れ替えを行います。前期は合併前の67市町村に関する作品を、後期は「長寿林檎樹」や「みょうが」等の代表作を中心に展示します。また会期中、加藤武夫氏によるワークショップを、前期・後期とも予定しています。



## 土曜セミナー

(平成19年10月6日／当館小ホール)

# 岩木山の民俗

学芸課長 成田 敏

岩木山は本県の最高峰(1625m)で、その美しい姿かたちから津軽富士ともいわれる。津軽地方の人びとはこの山を古くから信仰の対象とし、「お山」とか「お岩木様」と呼び習わしてきた。

岩木山信仰における特徴的な行事が「山かけ」とか「お山参詣」といわれる登拝行事である。これは五穀豊穡、家内安全を祈願して行われる津軽地方の秋の最大行事であり、修験の山入り作法の影響を受けたものとされる。旧8月1日に山頂に登るので「朔日山」(ついたちやま)ともいう。この日には津軽地方全域から、集落単位の団体が行列を組んで、参拝に集まってくる。カンナガラ(御幣)・大幟・供物などを持ち、笛・太鼓・鉦の囃子で「サイギ、サイギ」のかけ声をかけながら行進する。そして山頂の奥院に詣り、御来光を拝む。

農民の間では、岩木山は恵みをもたらす農業の神とされ、旧1月7日に岩木山神社で行われる「七日堂の神事」には多くの農民が参集する。この行事は一年の稲作の占う「柳の神事」「三拍子の神事」などが行われる。また、農民は岩木山の残雪の形を見て農作業の目安としてきた。これを「マナゴヨミ」といい、旧3月中旬に中腹に鋤の形をした残雪が見えると田打ち、旧5月に苗取りジッコの形が見えると田植えをしたものだという。

岩木山の神は女神だとされ、数多くの伝説が残されている。その中でも代表的なものが安寿(あんじゅ)と厨子王(ずしおう)の伝説である。森鷗外の小説で有名な『山椒太夫(さんしょうだゆう)』でよく知られているが、安寿が岩木山の神としておさまったとするもので、悪役の山椒太夫は丹後(現京都府)の住人だったため、丹後の人が津軽の地に入れば災いがあるとされた。また、津軽に三人姉妹の神がやってきて、それぞれが岩木山の主になりたいと願うが、3人で神楽を見物した時に末の女神がこっそり抜けがけして岩木山におさまってしまった。しかたなく長姉は岩木山の見えない小栗山、次姉は大坊(旧平賀町)に入ったという女神伝説もある。それ以来、小栗山(こぐりやま)村の人たちは岩木山のお山参詣をしないとされる。

岩木山は鬼の住む山ともいわれ、鬼に関する伝説や昔話が多い。鬼を大人(おおひと)ともいい、恐ろしい姿をした大きな男で強大な力を持った存在であった。戦国時代に、津軽為信の夢枕に「卍」と「錫杖」という二鬼が立ち、津軽統一に助力したともされる。現在の弘前市の市章である「卍」はこれに由来する。弘前の鬼沢には「鬼神社」がある。この村に弥十郎という百姓がいて、岩木山の赤倉へ薪切りにいったときに大人と相撲をとったことから仲良くなった。その後、この村の開拓に手を貸したことから村人が大人を神として祀ったのがこの神社だとされる。知己となろうというので相手仲良くなり、そのため、ここでは大人(鬼)を神として祀るようになったとされる。鬼神社には大人にちなんで巨大な農具類が奉納されている。



安寿像(左)と厨子王像(右)

弘前市・長勝寺蔵

かつて岩木山神社に併設されていた百沢寺旧蔵。百沢寺は明治初頭に廃寺となった。この二体は現在、旧百沢寺伝来の薬師如来像や五百羅漢像とともに、長勝寺「蒼龍窟」に安置されている。

来年は青函連絡船が就航してちょうど100年の節目を迎えます。明治41年(1908)3月に比羅夫丸、同年4月に田村丸が登場し、当時の鉄道院が直営しました。第二次大戦中はアメリカ軍の空爆により、津軽海峡を行き交う多くの青函連絡船が撃沈されました。戦後は連絡船の近代化が図られ、船体は堅牢となり、またタービンエンジンからディーゼルエンジンへの転換によりスピードアップが実現しました。しかし、昭和63年3月の青函トンネル開通に伴い、多くの人に惜しまれながら、その80年の歴史に幕を閉じました。

ところで、船の煙突に描かれているマークをファンネルマークといいます。青函連絡船のファンネルマークとしては国鉄時代の「JNR」や、たった1年間だけ使われた「JR」のマークが、なじみ深



▲写真1 「工」の字のファンネルマーク



▲写真2 レールで作った文鎮

いものです。それ以前は「工」の字が使われていました(写真1)。明治期の近代化政策の中で、鉄道事業を管轄した工部省の「工」の字が、その由来です。「白地に赤の工字」のデザインが省旗として用いられ、明治42年(1909)3月に鉄道院塗装規程が制定されるとファンネルマークに採用されました。

写真2は、青森駅開業88周年の記念品として、レールを輪切りにして作った文鎮です。青函連絡船をテーマにした筆者の講座を聴いて、受講者が持参したものです。この形も「工」の字で、由来の一つではないか、との質問をいただきました。いろいろ文献にあたりましたが「レールの輪切り型」説は結局見つかりませんでした。(竹村俊哉)

郷土の先人 21

新天地の開拓に託した夢

「ブラジル開拓の父」と称えられる前田光世は、不世出の柔道王としても有名です。明治29年(1896)に講道館へ入門し、異例の早さで昇段すると、同37年には嘉納治五郎(かのうじごろう)師範に米国行きを命じられ、ボクサーやレスラーとの異種試合に連戦連勝しました。リングネーム「コンデ・コマ」は、スペイン語のConde(伯爵)に、漢字の「高麗」=こま=Komaを合わせたものです。

欧米での日本バッシングに接した光世は、大正4年(1915)、排日感情の薄い南米に渡ります。昭和3年(1928)に南米拓殖会社が設立されるとその代行会社監査役となり、入植者の受け入れに奔走しました(弘前公園「前田光世君之碑」)。友人薄田斬雲(うすだざんうん)への手紙にも「この辺に日本人前田コンデ・コマの墓標はある筈だと、繁栄した同胞移民の手で苔の生えた小さな墓標が探し出される日があることを信じる」と、開拓

前田 光世 (まえだ みつよ)

1878(明治11)~1941(昭和16) 弘前市出身

への情熱を綴っています。

光世は礼儀正しく謙虚な人柄で、人々に尊敬されました。それらは弘前時代に習った本覚克己流柔術や、講道館柔道を通じて培われたものでしょう。昭和5年(1930)、ブラジルに帰化しますが、その際「コンデ・コマ」を本名にしています。ベレン市の道場には、総合格闘技ブームにつながるグレーシー家が通い、光世の技を現代に伝える役割を果たしています。(本田 伸)

本覚克己流「和実形証拠巻」乾冊より「矢倉落」の図 (小山隆秀氏蔵)



## 12月～3月の行事予定

### ○特別展・企画展

- 12月1日(土)～1月20日(日)  
「生誕100年記念 淡谷のり子展」  
1月25日(金)～1月27日(日)  
「児童版画展」  
3月29日(土)～4月30日(水)  
「和田エミ展」(仮称)

### ○催し物

- 12月22日(土)～1月14日(月)  
冬休み郷土館クイズラリー  
1月6日(日)  
冬休みめぐり回し大会

### ○工事休館のお知らせ

- 平成20年2月1日(金)～3月15日(土)  
レファレンス等には対応します。

### ○土曜セミナー

- 12/1 旧石器と縄文時代をつなぐ遺跡との出会い  
12/8 青森県の円空仏  
12/15 ふるさとの風俗(1)  
12/22 南部家の婚礼調度～漆器に秘められた喜びと悲しみ  
1/5 商家のくらしー淡谷悠蔵の生家を中心にー  
1/12 今純三と雪の考現学  
1/19 津軽海峡の先史文化交流  
1/26 青森県の石斧の多くは北海道産だった!?  
2/2 山の神の話  
2/9 生活の中の虫の話  
2/16 青森県に鉄道が達したころ  
2/23 地層から知る大地の歴史  
3/1 岩木山で発見された植物  
3/8 争うネブタの伝承  
3/15 発掘調査の舞台裏  
3/22 (テーマ未定)

### ※青森市福祉増進センター「しあわせプラザ」

- 一町田 工  
本田 伸  
今 純一郎  
佐藤 武司  
成田 敏  
昆 政明  
福田 友之  
齋藤 岳  
成田 敏 ※  
山内 智 ※  
佐藤 良宣 ※  
島口 天 ※  
神 真波 ※  
小山 隆秀 ※  
相馬 信吉 ※  
太田原慶子 ※



## 企画展 淡谷のり子展～生誕100年記念



淡谷のり子(青森市蔵)

昭和の歌謡界を代表する歌手淡谷のり子は、明治40年(1907)、青森市に生まれました。生家は当時手広く商売を営んでいた呉服商「大五阿波屋」で、裕福な少女時代をおくりました。しかしその後、青森大火など不運が重なって家は衰退し、のり子は母妹と上京します。母みねは、娘たちに自立

した女性の生き方を望み、のり子は本格的な音楽を学びました。天性の素質と師に恵まれ、大きな期待をになってクラシック界へデビューしますが、生活のために流行歌手の道を選びます。実力と華のある歌手として人気を博し、「別れのブルース」「雨のブルース」に代表されるヒット曲の数々を生み出しました。

本展では青森市所蔵の資料を中心に、「ブルースの女王」と呼ばれたその生涯をたどりま。また、のり子の叔父で本県の政治・文学・美術界に貢献した淡谷悠蔵(1897～1995)の関連資料もとりあげます。叔父と姪は別々の道を歩みながら互いに影響を受け、その存在を認め合いました。のり子の大きな支えとなった悠蔵との心温まる交流に焦点をあて、紹介します。



五所川原市喜良市／平成19年撮影

## 逃げられない神様

## この一枚

津軽地方では、家を新築すると神事を行い、神様を招いて、柱にワラジを結び付ける。そして、神事が終わると、このワラジの鼻緒を切ってしまう。ワラジを履いてきた神が帰れなくなって、ここに留まってくれるというのだ。

なるほど…! 確かに鼻緒が切れれば全く歩けないものだ。かわいそうに、山奥のお堂に閉じ込められたか。いつの時代から始まって、何人の神々があちこちに閉じ込められてきたのだろうか。

……ちょっと待てよ。履物からすれば、この神は垂直に立つ柱に、真横に立っていることになるぞ。なんとという神技! それだけ凄いならいつでも出ていけるな、と安心した。(小山隆秀)

総合博物館 青森県立郷土館だより Vol.38 No.3 通巻142号 2007.12.1

編集・発行 総合博物館 青森県立郷土館

〒030-0802 青森市本町二丁目8-14 TEL (017)777-1585(代)

